

人間にとって仕事とは何か こだわって研究会

「人間にとって仕事や職業とは何だろうか」。こんな疑問にこだわり続けて、毎月、研究会を開いたり、自宅の一室に仕事に関する本や資料を集めて「仕事図書室」をつくり、一般に開放している人がいる。大阪府羽曳野市羽曳が丘西三丁目自の団体職員四木信さん(四四)。「オリジナル・ワーキング・ライフ」の略で、「OWL(ダブル)」と名付けた。「主体的に自分の仕事や職業を考えることは、人生を考えることでもある」との思いが込められている。

四木さんがサラリーマンや職業選択に悩む学生らを対象に、初めての講演と話し合いの会「人生と職業」を大阪市内で開いたのは一九八九年三月。このとき集まったのは約二十人だった。その後はしばらく間があくが、九三年四月に第一回の「OWL仕事研究会」を開いた。以来、ほぼ毎月一回のペースで、大阪府北区の梅田東生涯学習ルームなどを会場に集まり、二時間前後の話し合いをするようになった。十四日の集いで十五回目になる。

研究会は、
「これからの働き方」「仕事や企業のあり方」「これからの仕事

観」「仕事に対する評価」など、毎回テーマを決め、企業の幹部、大学教授、会社員などをゲストに呼んで問題提起

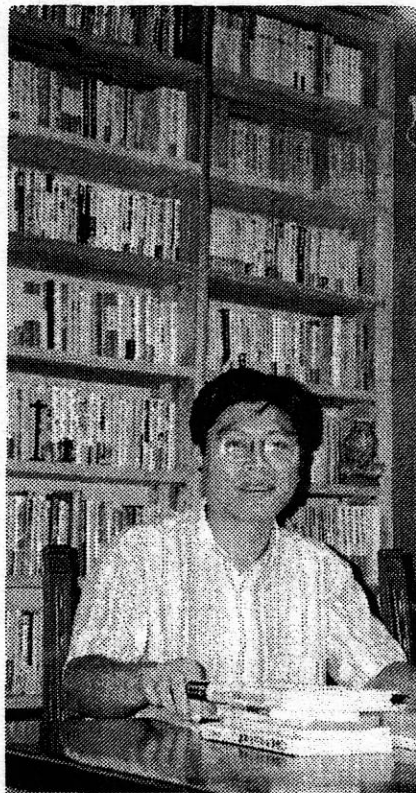
四木さんはなぜ、そこまで「仕事」にこだわるのか。

「自分の仕事をしっかりとしないと、どう生きていけるかわからない。この悩みはじめたのが大学受験を前にした三年ごろだった」という。自分の将来を考え、進学先を決める過程でぶつかった壁だ。

大学を入り直したりして結局、卒業したのは二十七歳。

その後、広告代理店の営業マンをはじめ転職を重ね、三十二歳のときから今の団体職員に落ち着いた。社会人になっ

長年集めてきた仕事に関する本を背に「サロン」として気軽に人生と仕事を考え続けられたら……」と話す四木信さん(大阪府羽曳野市羽曳が丘西三丁目自の自宅)



毎月テーマ決め討論

2500冊の自宅図書室を開放

をしてもいい討論する。参加者はこれまで毎回十五人前後。三十歳から四十歳代が中心で、六割がサラリーマンだ

が、ほかに公務員や研究者、教師、学生、組合運動家、小売店主らと幅広い。

研究会が三年目に入る来春、研究会が三年目に入る来春、研究会が三年目に入る来春

十代の若者が参加しやすいように工夫したいという。

仕事図書室は、今春から自宅玄関横の約十二畳の一室を

み続け、「同じように悩んでいる人同士が集まって考える場所」と図書室を開いた。

九一年一月、甲南大学経済学部の杉村芳美教授が書いた

きか、私が探し求めていた仕事をするというのには、人生でこういうことなのか、を考

しんといことだ。でも、よい仕事をするというのには、人生でこういうことなのか、を考

な意見を持った人と交流しながらやる方がいい」

研究会への参加者の一人、東大阪市の就職情報誌営業マン、富士尾有祐さん(三三)は

「社会人になって仕事のことを真正面から考えなくなっ

た。この年になって本当の仕事とは何か、を考えることは大切だと思えてきた。非日常的ですが、月に一度くらいこんなことを考える時があっ

ていて、

研究会、図書室の連絡先は四木さん(〇七二九一五六一七四八四)へ。

いろんな意見持つ人と交流

生活変えるきっかけに

「脱近代の労働観―人間にとって労働とは何か」を読み、

「目の前が明るく開けた感じがした。自分はどう生き、個人としての仕事はどうあるべ

きか、私が探し求めていた仕事をするというのには、人生でこういうことなのか、を考

るのには、仕事を自分のこととして見直していくことで、仕事や生活のあり方を変えていくきっかけになるはず。これは一人で考え込むより、いろ

研究会、図書室の連絡先は四木さん(〇七二九一五六一七四八四)へ。

「脱近代の労働観―人間にと

して協力している杉村教授は

るのには、仕事を自分のこととして見直していくことで、仕事や生活のあり方を変えていく

研究会、図書室の連絡先は四木さん(〇七二九一五六一七四八四)へ。

研究会、図書室の連絡先は四木さん(〇七二九一五六一七四八四)へ。